

ノミネーションノススメ

石井 純



みなさんはどの程度の頻度で飲みに行っておられるだろうか？ 小職の場合、本当のことを書くとボスにシバかれてしまうので控えめに言うと、週に1回は気が置けない仲間たちと飲みに行くようにしています。生物工学で代謝・発酵をかじっているはしくれとして、お酒を美味しくいただくには微生物の気持ちも分からない、というナゾの理屈で、行きつけの居酒屋に足繁く通うのであります。

もちろん息抜きを兼ねてアルコールを摂取しに行くわけですが、晩酌ではなく誰かと飲みに行く主たる目的は交流・情報交換にあります。当然ながら、美味しくお酒をいただいただけでは微生物の気持ちはまったく分かりませんが、色々な人と話をしている中でそのヒントが偶然に見つかる場合もあります。

たとえば、現在の私のポジションは学内メンバーで構成されるJSTの大型プロジェクトで賄われており、幸運なことに年齢の近い若手研究者が身近に大勢いる環境で過ごしています。しかし、みな日中は実験やデスクワークで忙しいため、まとまった時間を取るのが難しいのですが、居酒屋に連れ込んでしまえば落ち着いて話をすることが可能となります。こうしたメンバーはそれぞれの経歴に応じた経験や考え方を持っているため、研究に限らず自分の進路や考え方など、さまざまなことについて貴重な意見を仕入れることができます。とりわけ研究に関しては得意分野や技術を持っている人たちがばかりであり、酵母の遺伝子組換えしか能のない自分の狭い見では考えもつかなかったアプローチが見えてくることもしばしばです。

ここで少し私どもの研究について触れさせていただきますと、2008年度文部科学省科学技術振興調整費「先端融合領域イノベーション創出拠点の形成」プログラムにおいて、“バイオプロダクション次世代農工連携拠点”と題した委託事業として採択されており、神戸大学と十数社の協働機関（企業）との間で産学連携を推進しています。つまり、バイオマスを原料として燃料や化学品原料、ファインケミカルなどの色々な有用物質を微生物に作らせちゃおう、という研究です。なお、企業と協働して事業化につなげていくことで、これらの研究成果を社会に還元していくことを主たる目的としています。

ですので、一般的な大学での研究とは少し違って、企

業の方々と綿密に打ち合わせをしながら研究を進めています。企業の方々と一緒に研究を進めていく中でもっとも大学と異なると感じたのは、特許に対する考え方以上に、最終的な製造プロセスのスキームやコスト換算を念頭において研究を進めている点です。

企業と大学では役割やスタンス、求めてられているものも違うので一概に比較してしまうのは危険ですが、こうした経験も踏まえて自分が学生だった時を思い返すと、今以上に狭い視野と知識しか持ち合わせていなかったな、とつくづく思わされてしまいます。大学では博士号（修士号）を取得するために論文を出すことが必須であり、いかにして自分の研究を論文にまとめあげていくかを習得する必要がありますが、とりわけ当時は（今も？）自分の研究を客観的に判断できるほどの知識も判断力もないくせに妙なこだわりだけは強かったりして、独りよがりの価値観で自己満足の研究をしていたのかなとも思います。

優秀なみなさんはこんなひねくれ者にはならないと思いますが、ぜひいろんな人と触れ合ってください。その積み重ねがきっと後々の役に立つと思います。現在の小職のようにポストや若手の教員、企業の方々に恵まれた環境はあまり一般的とは言えませんが、学会の若手の集いや研究部会などは経験豊富な先生方や企業の方々と触れ合う絶好の機会なので、気後れせずにぜひ積極的に参加していただければと思います。

また、みなさんの研究室にも博士課程の先輩や修士課程の同輩・後輩は必ずいると思います。こうしたメンバーも我々同様の若手研究者であり、実際拙僧ごときでは、テーマや分野の違う学生さんと話をすると知らないことだらけで、今なお、さまざまなことを学ばせてもらっています。テーマやチームが違うとあまり研究の話はしないかもしれませんが、ボスにバレない（怒られない）程度に飲みに行くなり、お茶会するなりして、色々な分野の知識や技術を吸収しておくとか客観的な判断力を養うのにも良いと思います。

そして何より、たまには面倒くさがらずに貴方のボスとも飲みに行っておいてください。きっと他の誰より、大切なことを教えてくれているはずですよ。きっと……。